

ちよつと客観視して自分を外から見てるみたいなの

語り手 杉元天音（高校十一期生 ヨガインストラクター）

聞き手 齋藤 夢

*

高校生

―かなり緊張してて、うまく話せないこともあるかもしれないんですけど、よろしくお願いします。えーと、まずは立守の高入生って聞いたんですけど、立守を選んだ理由ってなんですか。

元々はバトントワリングを五歳からずっとやってまして。中学まで教えてもらっていた先生に習いたいっていうのもあった。あと、私の三つ上に姉がいて、姉もバトン部だったのでその流れで引き続いて入って。―じゃあ姉妹で同じ高校生活、同じバトンのチームでやってたんですね。五歳から大学生までずっとバトン部やったんですか。

一応、現役選手としてやったのは大学一回生までで、一回生の頃からちよつとずつこも（立守）OGとして見に来させてもらって。で、まあ縁があったので、「コーチとしてどうですか。」って言うって。ただいて、四年間、そのまま大学一回生の頃から、大学四回生、卒業ギリギリまで見ていて。

―バトントワリングを始めたきっかけってというのは、

その、習い始めたきっかけは、姉がまず、母校の小学校で体験に参加をして、そこで（姉が）習い始めてお迎えにくっついていったんですよ。最初は一年間ぐらい習ってないけど、ずっとやりたいという気持ちがあったみたいで、あんまり記憶ないんですけど、でも、さすがにちよつと親が止めていて、あんまり小さくできないだろうって言いなが

ら、（そしたら）先生にできますよ、天音もどうですか。みたいに言ってもらって、一年後にやるっていう形で、五歳でスタートになりました。

―なるほど。めちゃくちゃ長いですね。部活をしていて、やっぱりバトントワリングってチームスポーツだから、仲間とかとの、チームメイトとの関係性を作るって言うのは大事だと思うんですけどその時に大事にしていたことありますか。

私自身、当時は、嫌われてもいいから、相手のことを思っているっていうのは意識していたかなって思っていて。今はそれだけじゃ良くないっていうのもわかるようにはなっただんですけど、当時は言いにくいこととかも仲間として言うっていうことは、ずっと大事にしました。

―仲間のことを思ってた意見できるのってほんまにすごいと思います。部活が一番嬉しかった時ってなんでしたか。高校生のバトンをしていて。

どれが一番になるんだろうって感じですけど、高校三年生の思い入れが一番強いので、最後の全国大会で、当時の立命館守山の中での歴代の一番いい順位がもらえたのが一番嬉しかったですね。

―それが引退っていう試合やったんですよ。

一応バトン部として引退をしたっていう流れだったんですけど、同期一人しかいないんですよ。で、二人とも個人の大会も結構出てるタイプだったので、その後の二月の大会も。

―あ、また個人で。

そうです。一旦卒業っていう意味で一緒に練習参加してないけど、横で個人のちよつとやったりとか。クラブチームでたまに練習したり。―バトン部以外の練習にも参加されてたんですね。なるほど。じゃあ、部活とかしてたら嬉しいこともあったと思うんですけど、それだけじゃ

なくて、やっぱ悔しいこととかやりきれない思いというかもあったり。今覚えてることとどんなことがありました？

そっちの方が多かったんです。嬉しいことはもうほんとにちよつとだったんですけど。うーん。悔しいこと。どれを言おう。

—もう全部聞きたいです。

一年生の頃から初心者として入ってるわけではなく。部活の中ではバトンが得意なメンバーとして入っていたこともあって変なブライドがあったんですよね。今思うと良くない部分もたくさんあったんですけど、先輩にすら負けたくなくて。だから先輩に対してもガツガツ言っていました。

—こういうところをこうしましょうみたいなことですか。

はい(笑)。本当に生意気だった。なんかそういう負けたくないっていうのとか。あと大会でうまくいかなかったこともたくさんあるし、(バトンを)落としたりやったメンバーがたくさんいたりとか。なんでこうなってしまうんだろうっていう場面はたくさんあった。あと私、結構高校生の時コルセットが欠かせないくらい怪我が多くて。特に一年生の頃はそれ(怪我)と貧血があつて。当時二キロランニングがマストだったんですよね。なんで、その辺の部活動されてる人より走れたかもしれない。(笑)

—運動部ですよ。バトン部ってもう。

そうなんです。でも腰が痛かったり、脛の肉離れや貧血のせいで走れない。先輩に言える空気じゃないっていうのもあつて、

—怪我をした、痛いとかですか。

とかっていうのを、みんな何かしら痛みを抱えながらやっていたし、上下関係ももうバチバチに厳しかったから、痛いとか、「いやみん

な痛くてもやってるし」みたいな感じ。しんどい、「いや、みんなしんどいし」みたいな。

—じゃあ、その思いを抱えながら、痛くても練習っていう感じやったんですか。

一年の時に正直しんどかったなっていうのは、階段登ってくるのもきついくらい貧血がしんどくて、気づかないままランニングやってた時ダントツでビリで。でも当時の顧問の先生やコーチはそのランニングの姿見て、「まだいけるでしょ」「サボってるでしょ」みたいに言われて。どうしようって思ってた看護師の親に相談したら、病院行けばって言われて。そしたら案の定、貧血で、そこから鉄分の薬飲み出してやってたいたら、なんか(ランニングが)上から教えた方が早くなっちゃったみたいな(笑)。みたいな回復をして。怪我とか体調が悪いとか、自分の不本意なところで、うまくいかないところを、ずっとサボってるって思われてた悔しさだったりとか。怪我とか体調悪いとき筋トレできない時はその分影でできる筋トレを家でやりたりとかしてたんですけど、メンバーには見えてないから。サボっててやってないんじゃないかって言われたことがあつて。

—その時みんなやっていると痛いからできてなくてってことですよ。ね。

はい。でも家とか朝練とか他のメンバーの目に見えるところでやってなかったから、やってないんじゃないかって言われて誤解されたりとか。そういう摩擦はちよこちよありましたね。怪我に関しては。

*

現在

—今のご職業をされているのは、バトンも関係あったりしますか。

めっちゃあります。大学の四年間（バトンを）指導した経験が大きくて。就職活動の時に何がいいんだろうって色々考えてみて、「何が自分が今やって楽しいか」、「これだったら仕事にしてみたいって思うのはどれなんだろう」って考えた時に、何よりも指導がやりがいがあったって楽しかったって思ったのでそれを仕事に繋げられなかった。

ーはい。

でもちよつとバトンを。そのまま仕事ってなると、どうしても狭き門なので、クラブチームの先生とかになっちゃうんです。ここだけじゃなくて、クラブチームの先生もやってたし、高校とか中学とかも四校ぐらい教えたことあるんですけど、そうなっちゃうとバイトになるんですよ。なんで、ちよつとそれはできないなって。生活のこと考えた時に。それで正社員で、指導を活かすことがないかと思ってた時、フィットネス業界ってどうなんだろうなって思って。体動かすのが好きだから。それで色々考えてみた時に、ヨガのインストラクターとか、ピラティスのインストラクターっていうのをされているバトンの先輩がちょこちょこいた。そこに一旦アポ取って電話をして、話聞かせてくださいって言って、いいとこの面だけじゃなくて、実際の現場の人だからわかる話とかも聞かせてもらった上で、やっぱりやってみたいなって思えたので、指導をするっていうところが繋がって、ヨガのインストラクターっていう感じ。

ーなるほど。それって大学の学部は関係していますか？

全然してない（笑）。産業社会学部なので。私はメディア社会専攻っていう方で元々ヨガには全然興味も何もなくって、考えすらなかった。大学入る時は何回も、自分が将来そんなことするとも思ってたなくて、元々芸能をしたかったから。

ーはい。歌う方とかですか。

ちよつと演技の方やってみたかったんで、女優さんとかそっちの方に興味があつて。だから、就活っていうよりは、事務所での活動を、ちよこつとやった時期もあるんですけど。その中で、バトンをやってたから、表現は結構得意なつもりだったけど、セリフで表現するのは難しかったって気づいて。目いっぱい自分でやりたかったこととはちよつとまた違うのかもってなったんですよ。そこで、結構ギリギリに、やっぱり就職しようって決めて。もうみんなが就活終わってるタイミングで。

ーじゃあ、四回生くらいの時ですか。そこから今自分がやりたいことをまた考え直したってことですか。

うん。本当に、まさにそう。

ー進路を決める上で、自分が大事にしたこととかって何ですか。

お仕事ってほんとに難しいっていうことはわかってたんで、じゃあ、これならできるぐらいのもので探してみようかなっていうところから、狭めないで考えてみるっていうのは大事になって思いました。

ーバトンとあとヨガ。どっちもそうなんですけど、する上でのやりがいみたいな、どんなところにやりがいを感じるんですか。

教える上で、ですか？

ーどちらでも！ 競技する上で、バトンしてる最中に楽しいなって思うこととかもそうですし、教えててやっぱこういうところ楽しいなって思うところとか。

できるっていう感覚があるのは、めちゃくちゃやっぱり楽しいなって思うので。新しい技にチャレンジして、できないときはすごい辛いけど、どうやったらできるんだろうって考えて、できるようになった瞬間はやりがい感じます。あと、バトンって結構泥臭い競技なんです

よ。裏は。

—え、そうなんですか！

選手は（体を）痛めることも多いし、バトンで手はボロボロになっていくし。でも踊ってる時はもう見せないじゃないですか。笑顔でもやってたりとかするけど、文化祭とか大会の本番で踊って見てもらった時にすごいって言ってもらえたりとか、なんかすごい元気もらえた、感動したとかって言ってもらえることでいい影響を与えられたんだとかっていうところは、すごいバトンはいいなって思うし。ヨガに関してはインストラクターをやってる時間が長いので、人の成長と一緒に喜べる仕事だと思って。自分がバトンでやってた時に「できた」を、先生は多分それを一緒に喜んでくれたと思うんですよ。自分もコーチしてた時はそうだったし。お客様に今日めっちゃわかりました。つかめました。とか、なんかすごい体に効いた感じがしましたとか言ってもらえると、あーよかったなって思うし、なんか自分一人で個人競技としてやるっていうよりは、人が好きなので、その誰かの喜びと一緒に分かち合えるところはヨガもバトンも共通してすごいあるのかなって思ってます。

—去年の文化祭で初めてバトン部の演技見た時、めちゃくちゃ感動して鳥肌たちました。

*

ヨガの力

—もし今高校生に戻ったらこれやっときたい、みたいなそういうことあります。学校生活でもなんでもバトン関連でも。

今の自分の知識を持って帰れるのであれば、ヨガやりたかったです。高校時代に知りたかったという。ヨガやってみて一番良かったなって思うのがメンタルなんです。メンタルが良くなったとい

うか考え方とか。ヨガって、結構感情っていうのを俯瞰してみるっていうのを大事にしている。例えば怒りがあったとするじゃないですか。イラッとしましたってなった時に、それは第二の感情ですよ。っていうのがあって。第二の感情なので、その裏には悲しいって思ってるから怒ってるみたいな。例えば私がやってる仕事、五分前で受講受付が終了になっちゃうんですよ。で、急いで来られたお客様でも、もう五分になっちゃったら締め切っちゃうんですよ。レッスン受けられないです。ごめんなさいってお断りしなきゃいけない。でも、お客様は受けたかったからめっちゃ怒るっていう方もいるんですよ。「え、なんで。」みたいな。「ここまで来たのに、こんなに慌ててきたのに、入らせてくださいよ。なんでそんなこと言われなきゃいけないんですか。」みたいなになる。でも、断らなきゃいけない。入られへんのは一緒なんやし（そんな怒らなくてっも）って思うことも簡単にできるけど、このお客様は怒ってる裏としては、うちのレッスンが大好きで来たかった、受けたかったのに受けられなかったっていう悲しさが裏目にでて怒ってるって思ったら、いつもありがとうって思うし、なんかここまで受けたくて間に合わないかもって思って、やばいって思いながらも頑張ってきてくれたんだ。じゃあ、せっかく来てくれたから、受けられなかったけどちよっとお悩みについて聞いてみようかなとかとか。ここにきて良かったな。帰ってほしいなって思って、もうちよっと喋ってみたりとかするっていうのができるようになったんですよ。

—すごい。

なんかそれ、私高校の時できなかったの。正直結構短気な方だっ

なって思うし、相手が怒ってたら自分も怒りで返しちゃうこともあった。

でも今は相手の状況とかどうしてその感情になっているのかっていう裏の部分をすごい考えられるようになったんですよ。自分が傷ついた時も、気持ち下がっていくんじゃないかって「あ、なんか今落ち込んでんな、何が嫌だったのかな」って外から自分を見られるようになったというか客観視できるようになって。社会人になってからずっと長く落ち込んでる期間ってなくて。毎日ちゃんと楽しめてるのはそこ（考え方）が大きい気がする。その考え方とかはヨガで学べたなっていうのがあるから、高校の時に知れたらもっとチームのメンバーとぶつかることも少なかっただろうし、もっとチームがうまくまとまっていただろうし、より自分が出したかった結果も出ただろうしって思いますね。

—やっぱり私も結構感情に支配されることめっちゃあります。その考え新しい発想です。私もやってみます。

ぜひぜひ。高校生って結構色々大変じゃないですか。いろんなことに多分頑張ってる時だから、あとすごい感情も揺れやすい時期だと思うし、だからこそなんかそういう自分をいい意味でコントロールする力というか、私は欲しかったなって思うから、伝えたいなって感じです。

—今の話でめっちゃくちやヨガに興味が湧きました。

私のやってるとこはホット（ヨガ）になるんですけど。あたたかい空間ってだけで伸びが良くなる。柔軟性とかどうですか。

—硬いほうです（笑）。

じゃあいいかもしれないです。そもそも普通に普段やろうとしてる時だとなかなかストレッチできないところとかも伸びやすくなるし、空間にいてだけで勝手に汗出てくるので動きやすくなって代謝も上がる

し。

—そうなんですか。めっちゃ気になります。

機会あれば今度戻ってきた時に一緒に受けたりできるので。ヨガがメインなんですけど、エクササイズ系とかもいっぱいあるので、高校生の部活やってて動くの好きって子たちとかも絶対楽しいと思う。

—絶対行きます。めっちゃくちや行きたいです。

めっちゃくちや勧誘しちゃった（笑）。ありがとうございました。

—今日はいろんな話を聞かせていただいて本当に楽しかったです。こちらこそ本当にありがとうございました。

【感想】

ずっとやり続けてきたバトンにかける思いをたくさん聞かせてもらって、自分もスポーツに打ち込む身として話を聞きながらすごく尊敬したし、感銘を受けるようなはつとするお話をたくさん聞いたのがすごくいい経験になったと思った。私は進路についてまだまだ迷っているのでも、「何が自分ならできるか、これだったらできることを探す。」とおっしゃっていたことがすごく心に残り、これまで進路に対して考えるのがしんどかったけど心が軽くなった。



左：語り手 杉元天音さん
右：聞き手 齋藤 夢